

近世後期における江戸庶民の富士詣の実際 —富士講登山に着目して—

谷 釜 尋 徳¹⁾

Realities of visits to Mt. Fuji by the people of Edo in the late Edo period

TANIGAMA Hironori

Summary

The aim of the current study is to discuss visits to Mt. Fuji by the people of Edo in the late Edo period, with a particular focus on their worship of Mt. Fuji.

1. A person named “Jikigyō Miroku” appeared in Edo in the late 17th century to the beginning of the 18th century. Faith in him, named “Fujiko,” subsequently spread, making visits to Mt. Fuji popular.
2. Travelers departed from Edo and took the Kōshū Highway to Mt. Fuji. Once their visit to Mt. Fuji was complete, the people of Edo typically visited Oyama before returning to Edo.
3. Worship of Mt. Fuji by the people of Edo led to the creation of miniature Mt. Fujis, known as “fujizuka,” in the city of Edo, and eventually people worshipped those fujizuka.
4. For the people of Edo, Mt. Fuji was not only worshipped as a holy mountain, it was also appreciated in a way.

1. はじめに

都市化による貨幣経済の進展にともない、庶民層が武士を凌ぐ経済力を手にした近世後期の江戸では、庶民を担い手とする数々の娯楽が日常的に散らばっていた。そのような時代にあって、江戸市中を越境して楽しむ「旅」という娯楽が江戸庶民の間に広まっていく。近世庶民の旅は主として長距離を徒歩で移動するものであったが、交通機関の未発達な時代であればこそ、道中での見聞は

おろそかにはされなかった。それは、庶民が歩んだ道中には、そのあくなき好奇心を満たしうる様々な娯楽的要素が散在していたためでもあった。彼らは道中の名所旧跡を訪ね歩き、名物を口にするなどして滅多にない旅の機会に貪欲に異文化を摂取したのである¹⁾。

ところで、近世の庶民が公然と旅に出るためには、関所の通行を願い出る関所手形と身許を保証する往来手形の携行が必要とされた。関所手形や往来手形には旅の行先や目的が記されており、庶

1) 東洋大学スポーツ健康科学（白山キャンパス）研究室 〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

Sports and Health Science Laboratory, Toyo University, 5-28-20, Hakusan, Bunkyo-ku, Tokyo, 112-8606, JAPAN

民が娯楽として旅に出る場合には、その行先や目的は各地の神社仏閣としておくのが慣例であった²⁾。しかしながら、それは御利益に定評のある寺社への参拝を旅の目的としておけば、手形を発行する領主側も咎めることはなかったからで、そこに記された寺社は目的ならぬ「目的地」に他ならない。

こうして、信仰に定評のある寺社への参詣を大義名分として、その目的地間をも丸ごと楽しむというスタイルの旅が近世後期に庶民層を担い手として全国的な流行を博すことになる。随筆作家の喜多村信節が『嬉遊笑覧』（1830）の中で、当時の旅の傾向として「今人多く、鹿島詣よりは、まづ京師・大坂・大和廻りとて旅立、神仏に参るは傍らにて、遊樂をむねとす。」³⁾と記している通りである。

近世後期の庶民の旅には、往復路で異なる旅程を組んだり、目的地よりも遠くへ足を延ばす傾向がみられた。当時の旅行ガイドブック『旅行用心集』（1810）に「東国の人ハ伊勢より大和、京、大坂、四国、九州迄も名所、旧跡、神社、仏閣を見回り、西国の人ハ伊勢よりも江戸、鹿嶋、香取、日光、奥州松島、象潟、信州善光寺迄拜ミ回らんことを願ふなり。」⁴⁾と記されているように、この傾向は当時の旅全般に広くみられたものと推察されよう。ここに、近世後期における庶民の旅の娯楽性を垣間みることができる。

江戸庶民もこの流行に漏れず旅の世界を楽しんでいるが、彼らは伊勢などの遠隔地のみならず、江戸から比較的近郊の土地にもよく足を運んだ。とりわけ、歳時風俗とも絡んで流行したのが富士詣の旅であった。江戸庶民の富士詣には娯楽的な側面のみならず目的地たる富士山への信仰も確認される点は興味深い。「参詣の遊樂化」⁵⁾の時代に至っても、江戸庶民の旅の世界には依然として信仰が横たわっていたのではないだろうか。だとす

れば、江戸庶民は信仰と娯楽を組み合わせた巧みなバランス感覚をもって富士詣の旅をしていたことになるだろう。

こうした観点から、本稿では近世後期の江戸庶民を担い手として流行した富士詣の旅を取り上げ、彼らが旅に出るための名目として掲げた「信仰」に着目し、道中の娯楽的要素も捉えながら検討を加えることにしたい。なお、近世後期の江戸庶民の富士詣は、その多くが富士信仰にもとづく講集団を背景に行なわれた。そのため、本稿では江戸庶民の「講」の形態による富士詣（＝富士講登山）の旅を対象として取り上げるものである⁶⁾。

2. 日本古来より受け継がれた富士信仰

日本一標高が高い山として、あるいは絶景を誇る山として富士山は現代の日本人にとっても特別な山である。それは近世においても同様に庶民の信仰を集めていた。例えば、寛政9（1797）年刊行の『東海道名所図会』の中で秋里籬島が「四海無雙の名山にして、駿河・甲斐・相模三國に蟠るといへども、駿州富士郡にあれば富士山と號し、駿河の富士ともいふ。」⁷⁾と説明している。さらに遡ると、古代にも富士山は既に人々を引き付ける魅力を持っていた。そのことを探る史料として、以下で貞観17（875）年以降のものとされる都良香による登山記録『富士山記』を引用しておきたい⁸⁾。

「富士山者、在駿河国。峰如削成、直聳属天、其高不可測歴覽史籍所記、未有高於此山者也、其聳峰鬱起、見在天際、臨瞰海中、觀其靈其所盤連、亘數千里間、行旅之人、經歷日乃過其下、去之顧望、…」

上記引用文は概ね、富士は駿河の国にあり、天に向かって真っ直ぐにそびえ立ち、史籍に記する



図1 『東海道名所図会』に記された富士山
 秋里籬島「東海道名所図会」(1797)『東海道名所図会』日本名所図会刊行会, 1920より転載。

所を歴覽するに未だこの山より高いものはない。その様子は天の際にあるように見え、海中をも覗き込み、数千里を見渡し、旅人は登山にも難儀する、といった内容である。また、上掲の文脈は古代より富士山が一目置かれる存在であったことだけでなく、9世紀には既に富士登山が行なわれていたことを伝えている。なお、『富士山記』に記された都良香の登山は貞観6(864)年の富士山大噴火後の調査登山とも考えられており⁹⁾、こうした噴火も富士山の靈験を高める要因になっていたことは想像に難くない。

このように、古来より信仰を集めてきた富士山であるが、次に近世の状況のみておきたい。

3. 食行身禄信仰と富士講

3-1 食行身禄信仰と富士講

富士講とは「富士山へ参拝を目的とした信仰集団」¹⁰⁾のことである。富士講の開祖は近世初期の人物、長谷川角行とされており¹¹⁾、彼によって富

士講の奉じる富士信仰の雛形が形成されたという¹²⁾。

やがて、元禄～享保(17世紀末～18世紀初頭)の頃になると、江戸に食行身禄という富士行者が現れた。当時の江戸における下層民の暮らしの苦しさを目の当たりにした身禄は、富士仙元大菩薩の教えをもって庶民層の信仰を獲得していった。身禄の教えは従来の民間信仰とは異質のものであったが、現世利益を説く彼の教えに江戸庶民は共感を示し、富士山への信仰を一層強めていった。

食行身禄の教えの一端を知る手がかりとして、小泉文六郎が身禄より生前に伝聞したことを記した『小泉文六郎覚書』がある。そこでこの史料より一部抜粋し、以下で検討しておきたい¹³⁾。

「開ニ云、天地ハ水に決定セリ、如何と云ハ、天ハ空にして水のたもつ事なしとひも有りぬべし、先天ハ金の体也、天ニ星有り、星

ハ金のせい（精）なり、人間一人に一星なり、人間体金也、水ハ金□生スル物也、天は父の体也、父ハ子ニ愛スル事たまたまなり、天の父の子に愛スハ雨となりて子にうるおふ也、金□生スル水なれハ天ニ金せい有故、水生る事明カ也、地ハ母也、母ハ子ヲ愛ス事常也、故ニ不断泉わき流れてやむ事なし、然ハ天地ハ水なる事明カ也、又和合ハたかいに情あさくしてハ益（益）なし、情うすくしてハやわらきあわず、食ハ命ニ有とて元なり、然共大食ハ命にあらず、人間のからだわ堂塔也、家なり、菩薩を入ル堂ニあまり大勢入りて堂破損多シ、廿五人入る家ニ五十人・百人入てハこミ合て家損ス、又職ハ堂塔・家造立の為也、然ハ食ハ元なり、家職も食事も造立元也、宝ハ樹と云義ハ、如何なれハはかりハ宝也、是ハ口伝、」（下線、引用者）

以上は身禄の教えの一部分であるが、いずれも庶民に分かり易く教えが説かれている。特に下線部は食に関する知恵を与えるもので、家屋に例えて大食いを戒めているが、庶民生活に役立つ理になかった身禄の教えだからこそ現世利益を欲する庶民層に普及していったと考えられる。こうして江戸において食行身禄信仰が広まり、富士講登山流行の基盤が築き上げられていったのである。

享保17（1732）年、西日本に大飢饉（享保の大飢饉）が起こり江戸の米価が暴騰したが、これが引き金になって翌年江戸においてはじめての「打ちこわし」が起こった。この打ちこわしは幕府が高間伝兵衛に米を買い占めるよう指示したことから発生したものである。「食は元なり」として食行の行名を名乗っていた身禄は、民の食を奪った政治に反感を覚え、四民平等と貧しき者が安らかに暮らすことができる世の到来を願い世直しを目的とする入定（にゅうじょう 聖者が死去すること）を志し、

31日間の断食の後に入滅した¹⁴⁾。その時の様子は『武江年表』において「富士行者身禄といふ者、俗体にして富士へ登る事三十三度、終に今年六月十七日山の七、八合目にして絶死す¹⁵⁾」と伝えられ、『嬉遊笑覧』にも「富士山に登りて、みづから餓死したる身禄といひし者あり。」¹⁶⁾と記されている。

以後、身禄の教えはその弟子たちによって世に広められ、身禄派の富士講として江戸に山吉講、丸藤講、永田講などが誕生し、後に「江戸八百八講」と言われる程にまで発展していった。近世後期に顕著となる富士講登山の大半は、この身禄信仰と関係したものである。

3-2 江戸市中における富士講の活動

近世の江戸において活発化した富士講は、先達・講元・世話人の三役によって運営されていた。富士山に7度以上の登山経験を持つ先達は信仰や祭事面を取仕切り、講元は財務担当、世話人は講員相互間の連絡や費用の徴収にあたったとされる。

青柳周一の研究によれば、江戸における富士講の活動内容は、富士登山以外にも布教活動、金銭目的の病治し、出開帳入府の際の迎え、葬送への参加など広範におよんでいたという¹⁷⁾。しかし、こうした富士講の活動は幕府による規制の対象にもなった。新規の宗教を認めない幕府は、安永4（1775）年をはじめとして、以後、寛政7（1795）年、享和2（1802）年、文化11（1814）年、天保13（1842）年、嘉永2（1849）年などに富士講禁止令を発し、富士講を弾圧した。

以下、嘉永2（1849）年に出された富士講を規制する町触れを取り上げて検討することにした¹⁸⁾。

「嘉永二酉年九月 富士講一条二付 町御触

之控

富士講之義ニ付而ハ、度々町触之趣并ニ文化程度猶又内々ニ富士講先達と唱、不取止儀ヲ講釈等致、俗之身分ニ而行衣ヲ着し、望候者江護府（符）ヲ出し或ハ加持祈祷且人集メリ等致候始昧、愚昧□之事ニハ候得共、右之内ニは身分ヲ不顧其席江立交候族も有之由風俗ニも不宜、（中略）近來猶又御府内之外之者共講中（仲）間ヲ相立、追々信心之者不少哉ニ相聞不屈之事ニ候、今般寺社奉行所ニおゐて富士浅間師職共并ニ講中之内重立候者共ヲも相糺候処、其徂と尊信致ス書行藤仏并ニ書教ヲ伝來致候食行身禄と申者、神道・仏道ニも無之自己之存付ヲ以種々異様之儀申触婦依致候段、（中略）殊ニ江戸市中而已ニ無之最寄国々ニも講中江相加り、同様之所業ニ及ぶ候者有之哉ニ相聞、畢竟愚昧之者共追々心得違ヲも生候儀ニ付、今度は令有免以後食行同行杯と唱候講中間ヲ相立、或ハ行衣ヲ着し鈴ヲ持異形ニ而登山等致、平日も如何敷唱事又は俗人身分ニ而焚上と号加持祈祷ニ紛敷儀致…」

嘉永2（1849）年の町触では、富士講の活動として講釈、行衣の着用、加持祈祷などが規制の対象となっている。また、「御府内之外之者共講中（仲）間ヲ相立」や「江戸市中而已ニ無之最寄国々ニも講中江相加り」という文脈から、富士講が江戸市中の範囲を越えて普及していたことがわかる。さらに、「食行身禄と申者」「食行」と食行身禄の名が文面に記されていることから見ても、近世後期の嘉永2（1849）年には食行身禄信仰を奉じる富士講が江戸において盛んに活動を展開していたと考えられる。加えて、「行衣ヲ着し鈴ヲ持異形ニ而登山等致」という一文からは富士講登山時の旅装がうかがい知れるものである。と

もあれ、江戸市中の富士講の活動に対して幾度となく禁令が出されていること自体が、江戸における富士講による活動の過熱ぶりを表しているといえよう。

実際に富士講に参加した身分層は、庶民のみならず武士までも取り込むものであったという。青柳は江戸という都市の特徴として「武士と町人の混住」をあげ、そこに身分差を超えた文化的な交流・共有が少なからず生み出されていたために、富士講という民間宗教をも共有するに至ったとの見解を示している¹⁹⁾。しかし、富士講登山に参加した武士層は庶民層と比較すればおそらく少数であったといわねばならない。近世後期に富士講員として富士登山の旅をした者の職業を『文政九年正月 登山道者姓名帳』（1826）から見てみると、酒屋・八百屋・傘屋・大工・畳屋・瓦屋・鳶職・湯屋・米屋・魚屋・植木屋など商工業者が目立っていることがわかる²⁰⁾。富士講登山は江戸庶民を中心とした旅であった。

3. 富士講登山の実際

3-1 富士講登山の実際

富士山は例年旧暦の6月1日に山開きが行われた（7月末に閉山）。そのため、富士講員は朔日ついたちに合わせて前日の晦日（5月31日）に江戸を出立したという。こうした富士講登山の旅について『東都歳事記』（1838）は「富士参前日（五月晦日）より群集す。是富士禅定の心とぞ。駿河國富士山は、常に雪ありて登る事を得ず。故に、炎暑の時を待て登山す。是にならひに今日参詣するなり。」²¹⁾と伝えている。富士山はその高さゆえに雪の残っている時期が多く、雪のなくなる6月頃になってはじめて登山が許されたことがわかる。

江戸を出立した一行は、甲州街道を旅路として富士山を目指した。甲州街道の第一の宿場は内藤新宿であるが、富士登山を目的とした庶民がここ

に集っている様子を、『滑稽富士詣』²²⁾は次のように伝えている²³⁾。

「剣道修行角力取大家のむすこ鳶のものしよくにんあきんど田舎者思ひ思ひの富士詣往来にぎハふかしまだち花のあづまを跡に見てはや新宿にさしかゝる中にひとむれぎゝめくハ有徳な町家のむすこと見えてしたがふ連中五六人…」

このように、「しよくにんあきんど」つまり商工業者をはじめとして、様々な人々が「思ひ思ひの富士詣」を楽しむべく甲州街道の内藤新宿に群集をなしていたのである。また、旅人の行程について『滑稽富士詣』は次のように記している²⁴⁾。

「清見が関の眺望にしてそれハ駿河路是ハ又。そのうらを行なまよミの。甲斐の口から一同に。登る男女の富士同者。日野八王子の二夕宿へ。思ひ思ひにやどとりて。こゝに一夜をうちあかし。東天紅のにハとりと。共に起出仕度をとゝのへ。朝飯をハりて宿屋を立出。いそがぬ旅の気さんじに。道ふミかへて高雄山に。まうでるあれバ高札の。裏手を廻る女中づれ。駅路の鈴の駒木根の。関をこへても小仏の。…」

これによると、旅人は江戸を出立したのちに日野八王子辺りの旅籠に宿泊している。翌早朝に宿をあとにし、時間に余裕があれば途中高尾山にも詣で、再び富士山を目指して小仏の関所を通過するのだという。

次いで、天保12(1841)年に江戸より旅立った庶民の富士講登山の足跡をみていきたい²⁵⁾。

渋谷(在地)⇒府中⇒八王子⇒駒木野⇒小仏

⇒小原⇒与瀬⇒吉野⇒関野⇒上ノ原⇒鶴川⇒野田尻⇒犬目⇒鳥沢⇒申(猿)橋⇒駒橋⇒大月⇒谷村⇒小沼⇒吉田(富士登山口)

これは江戸(渋谷)で結ばれた庶民の富士講集団(講名は不明)が、天保12(1841)年の7月10日に富士登山を果たした際の往路の旅程である。この講中は渋谷より出立したために、前述した『滑稽富士詣』のように内藤新宿まで行くのではなく、直接甲州街道の府中へ出て、その後は甲州街道を利用して吉田まで向かっている。しかし、元の史料をみると八王子～駒木野間で「此間ニ高尾山何れも参詣」²⁶⁾と記されている。先の『滑稽富士詣』にも急ぎの旅でなければ途中高尾山に参詣することもある旨が記されていたが、近世後期における江戸の富士講でもやはり途中寄り道をして高尾山に参詣していたのである。これは、近世後期における江戸庶民の富士講登山の旅も「道中」に重きを置くものであったことを示す端的な例といえよう。

次いで、上京若松屋市郎兵衛を先達とする28人から成る富士講の往復路の旅程をみていきたい²⁷⁾。

<往路>

渋谷⇒新宿⇒鳥沢⇒猿橋⇒天の宮村⇒小沢⇒吉田⇒躰内中茶や⇒躰内⇒田辺⇒男女⇒強力⇒中茶屋馬返シ⇒二合目⇒三合目⇒五合目⇒六合目⇒六合七勺⇒七合五勺⇒八合目⇒九合目⇒頂上

<復路>

金明水⇒(東口)二合目⇒馬返シ⇒松田⇒関本⇒大山⇒二みの毛⇒小安⇒品川⇒渋谷

この講中も渋谷始発であるが、上述の講中とは異なり一端新宿まで出てそこから甲州街道を旅し

ている。また、彼らは富士登山を果たした後は、そのまま甲州街道を折り返すのではなく、渋谷には品川廻りで帰路に着いている。この講中は帰路に大山を訪れているが、富士詣の際に大山経由で帰着することは江戸庶民の定番ルートであった²⁸⁾。そのことは『嬉遊笑覧』にも「年毎に富士参する者は、大山にも詣る也。」²⁹⁾と明記されていることから知る事ができる。

こうした傾向は、富士山と大山との間に「片参り」忌避の伝承が存在したために生じたものである。「名所のセット化」という観点からこの伝承の解明に取り組んだ原淳一郎によれば、当該の名所を結びつけた要素として①交通ルート上の地理的關係、②参詣時期、③旅の貴重さ、④名所周辺にある他の名所群、⑤一方の名所が持たない魅力、⑥伝承、⑦民俗的意義、⑧宗教者の介在、などがあげられるという³⁰⁾。本稿では上記の諸要素に深く分け入っていくことは控えるが、富士山と大山の「セット化」の背景には、信仰という側面だけでは説明しきれない複合的な要素が働いており、そこに娯楽性が見え隠れしていたと考えたい。

さて、吉田まで来ると御師の手代が講中を出迎えるのが慣例であるが、その様子を『滑稽富士詣』は次のように記している³¹⁾。

「吉田のかたへ行過ぬ。よし田の町の入口にハ。登山の講中もちもちの御師のかたより出迎ふひとびと。むかふよりくる同者等の。荷物のしるし笠印をそれとみやりて小ごしをかづめ『これハこれハ一山講の御同行。おはやいおつきでござりました。わたくしハ山彦猿太夫がお出むかひのものでござり升。サアごあんない致ませうこちらへこちらへ」

吉田の入口は、それぞれの講中が所属する御師



図2 上京若松屋市郎兵衛を先達とする講の印

渋谷区編『渋谷区史料集 第二(吉田家文書)』渋谷区、1981より転載。

の手代でごった返していたという。御師の手代らは講中の荷物や笠に記された印(図2参照)によって自分が出迎えるべき講を判別していた。

御師の手代に出迎えられた講中は、以下に『滑稽富士詣』より示すように豪華な御師の邸宅に招かれて明日に控える登山の準備につとめた³²⁾。

「思ひ思ひの御しかたへ。うちつれだちて着くほどに。玄関よりはかまをつけたる御師のせわ人走り出『サアサアミなさまこちらへこちらへそれおすゝぎあげないかト此うち同行のひとつとハ。わらじきやはんをぬぎすて。案内にひかれてざしきへいたるに。庭の内いとひろく。清水のながれをせきいれたる。泉水の風流。ざしきの美麗目をおどろかし。(中略)斯ておくより世話人二人。はかまをりにて出来り同者へ時のあひさつをハレバ。帳面に名をひかへ例年の山入用を同者めいめいに受取りて明日登山の御衣わらじ金剛杖など幾人前と注文を得て。合力の荷物をやとふことまで約し。それらの料をも受取て。」

上記の描写にみられるように、御師宅はかなり豪華な造りになっていたとみえる。講員は衣類や草鞋、金剛杖などの物品を注文し、荷物持ちまで雇っているが、御師は富士登山に関して隈無く世

話をしてくれたようである。しかしながら、登山に必要な料金や荷物持ちに支払う料金など何かと金がかかった。だからこそ庶民は江戸市中で富士講を組織し、講単位で講金を出し合って毎年数人を旅立たせるというスタイルの「代参講」を好んだ。

翌日はいよいよ富士登山であるが、登拝口の本宮・吉田・村山・河口・須走には富士の象徴である浅間神社があり、吉田口から登った『滑稽富士詣』の主人公も「下仙元にうちまうで。つまだちのぼる登山門」³³⁾と、浅間神社に参っている。同史料に「一合目の寺にいたり。御師より持参の切手をおさめ。行衣に判をすへるとて。その料をねぎる滑稽。」³⁴⁾とあるように、まず一合目の寺で切手を納め行衣に印判した。二合目、三合目と富士の山を登り八合目に至ると、そこはもうかなりの高所で、「こゝハ八合目だからあめもしたをふりまさア」³⁵⁾と形容され、「こゝは地ごくの一丁目よりハもつとおつかねへ。ふじ山の八合目だ。」³⁶⁾と表現されるほどに、下界とは一線を画する霊験あらたかな世界であった。

さらに登って山頂に至ると、そこは日本一高い聖なる場所であった。ここでの様子を『滑稽富士詣』は以下のように記している³⁷⁾。

「是を仰バ眺望限りなきを嘆じ。登りて四方を見おろせば。暫時百景目前にあり。足もとより雲起り。三伏に雪を踏。雨ハ中途をふりて頂きにしめりなく。くぼき岩の間より。さゝやかなる烟立登るハ。昔の跡のしるしにやあらんずらん。(中略)男同者ハしたくをとゝのへ。金剛づえをつきならし。懸念仏も一同に。そろへるこゑの高根をさして。登りつめたる頂上の。やくし十二の石室に。着てハいとゞものすごく。おびへてしやれも口合も。でぬハ初心のくせなるべし。斯る中にも

としもどしに詣る同者ハまめだちて ほら十
『ライがら久さん。でへぶふさいできたの。
こゝじやアさすがのえどつ子も太平楽ハでますめへハゝゝゝ がら久『ナニそうじやアね
へがゆうべむろでさむいおめへをしたとミへて。せんきがづゝうになりやアがつて腹のむしがあばれてきたからそれでだまつてゐるのだハナ。』

こうして山頂まで登ると、そこには巨大な噴火口があった。近世においてこの噴火口は「内院」と称され、聖なる場所とされていた。山頂まで登った旅人はこの内院に向けて銭を投入し、無事の登頂に感謝しつつ我が身と家族の幸福を祈願したが、富士講の行者はこの行為を特に「お散銭」と言った³⁸⁾。こうして無事に富士講登山を果たした旅人は、思い思いに山を下っていった。

3-2 内なる信仰対象としての富士塚の誕生

以上、庶民の富士講登山の実際を概観したが、庶民の富士山に対する羨望の思いは「旅」という形態にとどまることなく、ついには江戸市中に人工の富士山たる「富士塚」を造り出し信仰対象とするに至った。

富士塚をはじめて築造したのは食行身祿の弟子で江戸高田（現・新宿区）に居住する植木職人の藤四郎であった。彼は身祿の信徒の協力を得て安永8（1779）年に高田の水稲荷の境内に高さ5m程の富士塚を築いた。この富士塚は富士山の五合目より上を模して造られたもので、黒ボク石と呼ばれる溶岩を富士山より採取し、塚の上に幾つも置いて築造された。その行程は、富士登山道の北口から桂川（相模川）を船で下って、三浦半島を迂回して江戸湾に入り、神田川をさかのぼって揚場河岸に着くと、そこから大八車で戸塚村まで搬送するというものであった³⁹⁾。こうした富士塚誕

生の経緯について『遊歴雑記』は次のように伝えている⁴⁰⁾。

「此水稻荷の地にふじを築し濫觴は、安永八巳亥年、当処の馬場下町長四郎といひし者、生涯の内三十余度駿州ふじ峯へ登山して、芙蓉峯の土を取来り、是を頂上に収めて築立たり、その高さ三四丈、富士の五合目に摸せしと也、是は男子さへ心弱きものは、山に酔て十里の高嶽登りがたし、况や障り多き垢穢の婦人は山荒すさまじくして、老若ともに登山なりがたきを歎き、長四郎心願を起し、爰に富嶽を摸して、男女・老少ともに心安く登山する様にとて築立しものなり、常は山の口を閉て、上下する事を禁ず、是は頂上より裾にいたる迄まはりまはり登り下りする路の左右、みな黒朴こくぼくといへる石のみを集めて、明間なく築立たれば、只山のかたち何の風情もなく、黒朴の石を束ね積上たるが如し…」

当時の富士山は、女性はもとより気の弱い男性も登れるようなところではないと考えられていて、そういった人々のために富士塚が築造されたのである。このことは、それ程までに江戸庶民が富士を欲していたことを示す出来事であったと見なされよう。

こうして、『東都歳事記』（1838）に「石をたゝみて、富士をつくる事、近世の流行なり」⁴¹⁾と記されているように、「高田富士」をはじめとして江戸市中に富士塚が多数築かれるようになった。この「身近な信仰」は近世後期にかけて大流行したという。江戸を越境し異郷の地に存在する富士山へ登ることを「外への信仰」とするならば、江戸市中に散在する富士塚への信仰はいわば「内なる信仰」とでも称すべきものであろう。

実際に富士塚に対して庶民がどのように信仰心

を仰いだのかについて、『守貞謾稿』には以下のように記されている⁴²⁾。

「五月晦日、六月朔日の両日 江戸浅草・駒込・高田・深川・目黒・四ツ谷・茅場町・下野〔谷〕小野照（以上八所、ともに江戸の地名なり。並に富士山を模造して、浅間の神を祭れり。平日はこの模山に登ることを聴さず、この両日のみ詣人を登す。けだし駒込を江戸の本所とす）等、富士詣でと号して群集す。各所、必ず麦藁製の蛇形を生杉枝に纏ひたるを売るに、大小あるとも皆同制なり。富士詣人の方物とす。」

江戸庶民は毎年5月晦日と6月1日を山開きとして、普段は禁じられていた富士塚への登山を行い、富士山への信仰心を仰いだのである。富士塚で行われた登山については、小川顕道の文化11（1814）年頃の作品『塵塚談』に「駒込富士権現祭、毎年五月晦日より六月朔日迄、参詣夥し」⁴³⁾という記述が確認される。これを通して後期の富士塚登山の様子を知ることができよう。

表1は岩科小一郎の研究をもとに、近世において江戸やその近郊に築造された富士塚に関してまとめたものである。

表1によれば、富士塚は近世後期になって相当数が築造されているが、このことから後期における富士講登山の流行ぶりを看取することができる。また、造立場所の分布から富士塚築造という「流行り」が江戸のみならず近郊地にまで及んでいることを見て取ることができる⁴⁴⁾。とりたてて旅費を必要とせず、気軽に富士信仰を仰げる富士塚なればこそ庶民層に受け入れられ、各地にその数を増やしていったのであろう。

歌川広重は文政2（1819）年築造の目黒新富士を題材にして、『名所江戸百景』の中に「目黒新

表1 近世における江戸及び江戸近郊地の富士塚築造一覧

造立年代	造立場所	築造講名
安永 8 (1779)	高田	丸藤講
寛政元 (1789)	千駄ヶ谷	烏帽子岩講
寛政 2 (1790)	築地鉄砲州	丸藤講
文化 9 (1812)	目黒元富士	丸旦講
文化11 (1814)	十条	丸参伊藤講
文化14 (1817)	音羽護国寺	山護講
文政 2 (1819)	目黒新富士	山正講
文政 3 (1820)	深川八幡	山玉講
文政 7 (1824)	千住川田	丸藤講
文政 8 (1825)	中里	丸嘉講
文政 9 (1826)	小石川白山	山水講
文政11 (1828)	下谷坂本	東講
天保 4 (1833)	砂町元八幡	山吉講
天保 5 (1834)	羽田	木花元講
天保10 (1839)	江古田	丸祓講
天保13 (1842)	東大久保	丸谷講
天保13 (1842)	打越	月三講
弘化 2 (1845)	成宗	丸参講
安政 2 (1855)	板橋	永田講
文久 2 (1862)	椎名町	月三講
慶応元 (1865)	南千住	丸滝講

岩科小一郎『富士講の歴史—江戸庶民の山岳信仰—』名著出版, 1983より作成。

富士」と題して描き込んでいるので、その作品を掲げておきたい（図3参照）。

3-3 富士講登山流行の背景としての江戸人の風景観

ここまで述べてきたように、江戸庶民による富士講登山は大流行を見せた。その流行の直接的な要因としては、やはり食行身禄の教えが庶民層に受け入れられ、身禄信仰が江戸中に広まったことによるところが大きい。しかしながら、その他に

も江戸に居住する人々の風景観を要因としてあげることができる。

超高層ビルの建ち並ぶ現代の東京とは異なり、近世の江戸においてはいたる所から富士山を望むことができた。そのため、江戸の人々は高さとしさを兼ね備えた富士山を眺めながら日々を過ごしていた。富士山の美しさは江戸のように富士山を直接望むことのできる地域だけではなく諸国にも知れ渡っており、大坂人の井原西鶴をして「是蓬萊山の^{なが}詠め嶽は八葉に分て芙蓉を削がごとし三

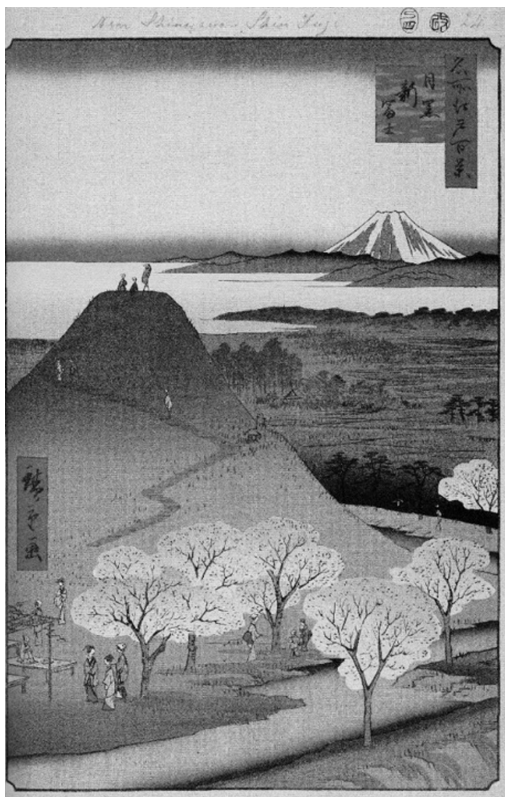


図3 文政2(1819)年築造の目黒新富士
歌川広重「名所江戸百景 目黒新富士」(1857)ス
ミス著・生活史研究所訳『広重 名所江戸百景』
岩波書店, 1992より転載。

國無双の美山也⁴⁵⁾と言わしめたほどである。

このように諸国にその名をとどろかせ、とりわけ江戸庶民に崇敬された富士山であったが、江戸および江戸近郊の行楽地は飛鳥山、御殿山、愛宕山などをはじめ自然と触れ合える場所が多く見られる点に注目しておきたい。山本光正もこの点に着目し、こうした場所に江戸の名所ができるようになった要因を「江戸市民の風景観」に求めている⁴⁶⁾。山本は「江戸市民というより、日本人の多くは、風景のなかに水と山を求めた」⁴⁷⁾との見解を示す。また、山本は近世の絵画史料に「水と山」が頻繁に描かれていることを指摘し、その「水」として隅田川、「山」として富士山が主な風景であったと述べている⁴⁸⁾。こうした山本の見解

に従えば、富士信仰の背景には庶民の風景観が大きく作用していたということになる。

富士山に愛着を持っていた江戸庶民はより良い条件で富士山を眺めようとした。その結果、「富士見坂」など絶景の富士山を望める名所とでもいふべき場所が江戸の各地に誕生したのである。『遊歴雑記』にも好条件で富士山を見ることができ場所について以下のように記されている⁴⁹⁾。

「武州豊嶋郡下高田村(東京都新宿区下落合)の山手の方、ふじ見の茶屋といふは、藤稲荷より東北三町にあり、則ち溜坂といふを溶り登る事壱町にして爰にいたる、雑司谷より堀の内等へ往来たり、此处高き事六七丈、此茶店より真正面に能美容峯(富士山)を見る相対するが如く、更に外にかけ障りなし、その外東西南一里ばかりの間、遠山又は農田を眺望し、或は和田戸山につゞきて大久保より四ッ谷の果迄、遙に松・杉の天然に屈曲して霞を帯し様、藁家の棟のやはらか成、田を打、畑を耕し、幽に人の行かふ風情、実に一瞬千里の美景は言語にたえ筆端に尽しがたし」

『遊歴雑記』の著者である十方庵敬順によれば、絶景の富士山が望める「ふじ見の茶屋」が前述した高田の富士塚より東北に3町(約300m)の場所にあったという。この茶屋は溜坂という坂をひたすら登った所に位置し、高さ20mほどで真正面に富士山が良く見える場所であった。また、当地は周辺に遮るものが何もなかったために、遙か向こうの絶景が見渡せ、かすかに人々の行き交う様子を見ることもでき、「言語にたえ筆端に尽しがたし」であったという。

江戸庶民にとって富士山とは霊山としての信仰対象であっただけではなく、一種の観賞の対象で

もあったのである。

4. 結び

本稿における検討の結果に若干の所見を交えてまとめると、以下のように整理することができる。

1. 富士山は古来より人々を引き付ける魅力を持っていたが、その信仰が庶民層に広まったのが近世という時代であった。17世紀末～18世紀初頭頃に江戸に食行身禄という富士行者が現れた。身禄の教えは従来の民間信仰とは異質のものであったが、現世利益を説くその教えに江戸庶民は共感を示し、富士山への信仰を一層強めていった。こうして江戸において食行身禄信仰を奉じる富士講が広まり、富士講登山流行の基盤が築き上げられていったのである。
2. 江戸における富士講の活動内容は富士登山以外にも布教活動、金銭目的の病治し、出開帳入府の際の出迎え、葬送への参加など広範にわたっていたが、こうした富士講の活動はその過熱ぶりからしばしば幕府の規制の対象ともなっていた。富士講に参加した身分層は武士までも取り込むものであったが、実際に富士登山に参加したのは商工業者（庶民）が大半を占めていたと推察された。
3. 江戸を出立した一行は、甲州街道を旅路として富士山を目指した。登山口の吉田まで来ると、講中は御師の手代に出迎えられ、その後御師宅に宿泊しそこで登山に必要な物品を調達した。富士登山はまず登拝口の浅間神社に参詣することにはじまった。山頂まで登るとそこには「内院」という噴火口があったが、旅人はここに向けて銭を投入し祈りを捧げた。富士詣を終えると、大山に参詣して江戸に帰着するというのが江戸庶民の定番ルートであった。
4. 江戸庶民の富士山に対する羨望のおもいは旅

という形態にとどまらず、ついには江戸市中に人工の富士山（＝富士塚）を造り出し、これを信仰対象とするに至った。富士講中による富士塚の築造は近世後期に顕著にみられるが、これによって富士講登山は市中においても模擬的に行われるようになった。とりたてて旅費を必要とせず、気軽に富士への信仰心を達成できる富士塚なればこそ庶民層に受け容れられ、各地にその数を増やしていったのであろう。

5. 富士講登山が流行した背景の一つとして、江戸に居住する人々の風景観があった。そのことは、近世の絵画史料に水と山が頻繁に描かれており、その山のモデルとして富士山が最も多く選び取られていたことから窺えた。江戸庶民にとって富士山とは、霊山としての信仰対象であっただけでなく、一種の鑑賞の対象でもあったといえよう。
6. 江戸庶民の旅が流行を博した背景として、江戸の都市化にともなう庶民層への貨幣経済の進展や余暇の発生、旅人が歩む「道」の整備、文化の大衆化などといった視点を設定することができるが、本稿で検討した信仰的な側面も見逃すことはできない。なぜなら、御利益に定評のある各地の寺社に関する信仰が庶民にまで広まっていなければ、彼らが旅に出るための「大義名分」は成立しえなかったためである。庶民の信仰が世俗化しないしは大衆化した近世後期に至っても、江戸庶民の富士詣の旅には「信仰」が横たわっていたことをここに確かめておきたい。

<注記および引用・参考文献>

- 1) 谷釜尋徳「近世後期の伊勢参宮の旅にみる楽しみ方の類型—関東地方の庶民による旅日記の分析から—」『日本体育大学紀要』36巻2号, 2007.3, pp. 183-196
- 2) 享保9（1724）年に江戸八丁掘に住まう庶民が伊勢

参宮の旅をした際、最重要関所たる箱根関所を通過する時に提出した関所手形の文面を掲げておきたい(原史料は縦書き)。文中に「伊勢参宮仕候」とあり、旅の目的として伊勢神宮が掲げられている。

指上申手形之事

一、此者吾人伊勢参宮仕候、御関所無相違御通シ被為可被下候、為後日指上手形依而被如件

江戸八丁堀三丁目

家主 甚兵衛

享保九年辰閏四月六日

箱根御関所

御当番衆中様

(「指上申手形之事」(1724)箱根関所資料館蔵)

- 3) 喜多村信節「嬉遊笑覧」(1830)『嬉遊笑覧(三)』岩波書店, 2004, p. 381
- 4) 八隅蘆菴「旅行用心集」(1810)『旅行用心集』八坂書房, 1972, p. 1
- 5) 新城常三『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』塙書房, 1982, p. 735
- 6) 本稿に関連する研究として岩科小一郎の『富士講の歴史』をあげることができる。この大著はとりわけ富士講のシステムに着目したもので、江戸庶民の富士詣のあり方を詳らかにしたものと視点が異なる(岩科小一郎『富士講の歴史—江戸庶民の山岳信仰—』名著出版, 1983)。一方、青柳周一は「観光地域史」の視点から富士詣の実際を論じている。ホストとゲストの関係性に着目した切り口は本稿に重要な示唆を与えるものであった(青柳周一『富嶽旅百景—観光地域史の試み—』角川書店, 2002)。また、青柳は富士講を交通史的な視点から論じた報告も行っている(青柳周一「富士講と交通—江戸の富士講を題材に—」『交通史研究』33号, 1994. 5, pp. 10-27)。この研究は、江戸の富士講の流行現象を知るうえで示唆に富む内容を多数含んでいる。
- 7) 秋里籬島「東海道名所図会」(1797)『東海道名所圖會』大日本名所圖會刊行會, 1920, p. 635
- 8) 都良香「富士山記」(875~)品川区教育委員会編『品川の富士講と山開き行事』品川区教育委員会, 2002, p. 79
- 9) 品川区教育委員会編『品川の富士講と山開き行事』品川区教育委員会, 2002, p. 23
- 10) 日本史広辞典編集委員会編『日本史広辞典』山川出版社, 1997
- 11) 長谷川角行は長崎の出で、永禄元(1558)年に18歳で常陸国を経て奥州脱骨(遠谷)窟(岩手県)にいたり、21日の修行を行ったが、その修行の中で富士山での修行を役行者(山岳修行者)からの御告げを受けた。その結果、富士山西麓の人穴に入り、4寸5分約(13.6cm)角の角材を立て、その断面に両足を爪先立ちで乗る荒行千日を4回行ったという。また、元亀3(1572)年富士に登山し翌天正元(1573)年には神示を受け人穴を出て琵琶湖をはじめ諸国の外八海、富士山周辺の内八海でそれぞれ「百日夜食立(じきだち)大行」を行った。富士山を「明藤開山」として、神・仏・儒の既存の宗教に陰陽道を合わせ、さらに独自の考えを入れて、崇拜対象を確立した。その後、角行は元和6(1620)年3月再び人穴に入って修行をしている際に、江戸よりきた富士登山者に江戸での「つきたおし(コレラか赤痢など病死を伴う伝染病)」に対する祈祷を依頼され、彼らに呪符を授けた。彼らが江戸に帰りそれを病人に頂かせたところ皆治ったという。これが契機となって江戸での富士信仰は高まり、富士講が生まれたという(品川区教育委員会編『品川の富士講と山開き行事』品川区教育委員会, 2002, pp. 28-29)。
- 12) 青柳周一「富士講と交通—江戸の富士講を題材に—」『交通史研究』33号, 1994. 5, p. 12
- 13) 「小泉六文郎覚書」渋谷区編『渋谷区史料集 第二』所収, 渋谷区, 1981, p. 75
- 14) 岩科小一郎「富士講」西山松之助ほか編『江戸学事典』弘文堂, 1994, p. 337
- 15) 斎藤月岑「武江年表」(1850)『増訂 武江年表1』平凡社, 1968, pp. 135
- 16) 喜多村信節「嬉遊笑覧」(1830)『嬉遊笑覧(三)』岩波書店, 2004, p. 405
- 17) 青柳周一「富士講と交通—江戸の富士講を題材に—」『交通史研究』33号, 1994. 5, pp. 14-15
- 18) 「富士講一条二付町御触之控」(1849)渋谷区編『渋谷区史料集 第二(吉田家文書)』渋谷区, 1981, pp. 70
- 19) 青柳周一「富士講と交通—江戸の富士講を題材に—」『交通史研究』33号, 1994. 5, p. 16
- 20) 「文政九年正月 登山道者姓名帳」(1826)渋谷区編『渋谷区史料集 第二(吉田家文書)』渋谷区, 1981, pp. 34-60
- 21) 斎藤月岑「東都歳事記」(1838)『東都歳事記2』平凡社, 1970, p. 74
- 22) 仮名垣魯文によって著された江戸庶民の富士詣を題材にした滑稽本で、万延元(1860)年から文久元(1861)年にかけて刊行された。
- 23) 仮名垣魯文「滑稽富士詣」(1860~61)『滑稽富士詣 上冊』古典文庫, 1961, p. 6
- 24) 仮名垣魯文「滑稽富士詣」(1860~61)『滑稽富士詣 上冊』古典文庫, 1961, p. 41
- 25) 「富士山道中記山内控」(1841)渋谷区編『渋谷区史料集 第二(吉田家文書)』渋谷区, 1981, p. 64
- 26) 「富士山道中記山内控」(1841)渋谷区編『渋谷区史料集 第二(吉田家文書)』渋谷区, 1981, p. 64
- 27) 「富士山道中記山内控」(1841)渋谷区編『渋谷区史料集 第二(吉田家文書)』渋谷区, 1981, p. 68
- 28) 万延元(1860)年刊行の富士登山のガイドブック『富士山道知留邊』には「江戸より富士山道 富士より大山石尊へ廻り江戸へ入る道路」が次のルートをもって紹介されている。これは、当時一般化していた江戸庶民の往復路を反映した定番ルートだと考えることができる(松園梅彦「富士山道知留邊」

- (1860)『富士吉田市史 史料編第五卷 近世Ⅲ』富士吉田市, 1997, pp. 332-447)。
 <往路>江戸⇒新宿⇒高井戸⇒府中⇒日野⇒八王子⇒大月⇒吉田⇒富士山
 <復路>富士山⇒須走⇒足柄峠⇒矢倉沢⇒関本⇒蓑毛⇒大山⇒子安⇒品川⇒江戸 (厚木⇒世田谷⇒江戸のルートが併記)
- 29) 喜多村信節「嬉遊笑覧」(1830)『嬉遊笑覧(三)』岩波書店, 2004, p. 402
- 30) 原淳一郎「近世期名所のセット化と富士・大山参詣」『日本歴史』637号, 2001. 6, pp. 46-47
- 31) 仮名垣魯文「滑稽富士詣」(1860~61)『滑稽富士詣 上冊』古典文庫, 1961, p. 59
- 32) 仮名垣魯文「滑稽富士詣」(1860~61)『滑稽富士詣 上冊』古典文庫, 1961, p. 60
- 33) 仮名垣魯文「滑稽富士詣」(1860~61)『滑稽富士詣 上冊』古典文庫, 1961, p. 78
- 34) 仮名垣魯文「滑稽富士詣」(1860~61)『滑稽富士詣 上冊』古典文庫, 1961, p. 78
- 35) 仮名垣魯文「滑稽富士詣」(1860~61)『滑稽富士詣 上冊』古典文庫, 1961, p. 131
- 36) 仮名垣魯文「滑稽富士詣」(1860~61)『滑稽富士詣 上冊』古典文庫, 1961, p. 139
- 37) 仮名垣魯文「滑稽富士詣」(1860~61)『滑稽富士詣 上冊』古典文庫, 1961, pp. 148-149
- 38) 遠藤秀男『富士山よもやま話』静岡新聞社, 1992, p. 165
- 39) 遠藤秀男『富士山よもやま話』静岡新聞社, 1992, pp. 175-176
- 40) 十方庵敬順「遊歴雑記」(19世紀前半)『遊歴雑記初編2』平凡社, 1989, p. 27
- 41) 斎藤月岑「東都歳事記」(1838)『東都歳事記2』平凡社, 1970, p. 75
- 42) 喜田川守貞「守貞漫稿」(幕末期頃)『近世風俗志(守貞漫稿)(四)』, 岩波書店, 2001, pp. 218-219
- 43) 小川顕道「塵塚談」(1814)『燕石十種 第一卷』中央公論社, 1979, p. 286
- 44) 岩科小一郎によれば, 近世における富士塚築造の分布範囲は現在の神奈川, 埼玉, 千葉県にまで及んでいたという(岩科小一郎『富士講の歴史—江戸庶民の山岳信仰—』名著出版, 1983, p. 272)。
- 45) 井原西鶴「一目玉鉾」(1689)『定本西鶴全集 第九卷』中央公論社, 1951, p. 193
- 46) 山本光正「江戸への道・江戸からの道」加藤貴編『大江戸歴史の風景』山川出版社, 1999, p. 18
- 47) 山本光正「江戸への道・江戸からの道」加藤貴編『大江戸歴史の風景』山川出版社, 1999, p. 18
- 48) 山本光正「江戸への道・江戸からの道」加藤貴編『大江戸歴史の風景』山川出版社, 1999, p. 18
- 49) 十方庵敬順「遊歴雑記」(19世紀前半)『遊歴雑記初編1』平凡社, 1989, pp. 49-50